

選挙戦中盤を迎え、各候補は18日、川崎市内各地で支持を訴えた。右から國谷氏、野末氏、福田氏、山田氏、関口氏



選挙戦中盤 訴え熱く

26日に投票を迎える川崎市長選は中盤を迎え、各候補は18日、多くの人出でにぎわう主要駅周辺やイベント会場に立ち、有権者にそれぞれの訴えを届けた。秋晴れの空の下、支持を求める声が街に響き渡る。155万人都市のかじ取り役を託す1票を巡り、選挙戦はいよいよ熱を帯びている。

(川崎市長選取材班)

会社員の新人、國谷源太

氏(25)は向ヶ丘遊園駅(多摩区)など市北部や中部を中心に演説を展開した。武蔵小杉駅(中原区)では若さを前面にアピールし「川崎の未来に責任と覚悟を持って向かっていきます」と政策への理解を求めた。

「ここまでは街頭での活動が中心だ。交流サイト(SNS)では演説日程をXに投稿する程度にとどまる。『今の時代、選挙の中心はSNSだけど、直接会って話した方が印象に残ると思う。一人でも多くの人に会うことを優先している』。市内の全駅に立つことを目標に掲げ、『他の候補者を

10・26
川崎市長選

主要駅、イベント会場へ

気にしても仕方がない。思いを一人でも多くの人に届けた」と力を込めた。

政界役員の新人、野末明美氏(60)は「共産党推薦」は向ヶ丘遊園駅で演説をスタートした。

告示日以降は街頭だけでなく、SNSを毎日更新し、幅広い層へ支持を呼びかける。「川崎市を変えたいけど誰に投票すればいいのか。その判断材料としてビラをもらってくれる人も増えてきた感触がある」と手応えをかみしめている。

新百合ヶ丘駅(麻生区)や元住吉駅(中原区)で街頭演説をした際には、ビラ配りが間に合わないほどの大勢の人が集まったという。それでも、まだ思っている。『多くの市民に私の政策を届けたい。届け切れれば勝てる自信はあります』

現職の福田紀彦氏(53)は公務を終えると、サッカー

J1川崎フロンターレのサポーターが集まる試合前の等々力緑地(中原区)に足を運んだ。4期目の公約を自ら配り、老若男女から写真撮影を求められた。「コアな人たちにも政策を伝えていかないとけない」と表情を引き締める。

街宣車は走らせず、朝晩は主要駅でビラを配布する。日中は「青空集会」と称した政策を伝える場を設け、これまでに約100カ所を実施した。「怖いという声ももらっている」と語る。投票率の低さを懸念し、今回の選挙戦から若者世代を意識したインスタグラムでの投稿にも注力する。

元川崎市議の新人、山田瑛理氏(42)は武蔵小杉駅で、「皆さんが今抱える大変なことを聞き、今よりすてきな街だと思ってもらえる川崎にしていきたい」と繰り返して訴えた。

所属していた自民党を離れ、無所属となった「裸一貫」と評し、駅頭では市民との対話にも力を入れる。一日の締めくくりののぼりを片付け、帰路の車内では活動報告を生配信する。

政治とは無縁だった市民ら約30人の「TEAM YAMADER」が活動を支援。

SNSなどの投稿の反響を積み重ねた「アクション」数は目標だった1万を4日目で達成し、現在は5万に上方修正。幅広い世代への浸透も目指している。

清掃員の新人、関口美氏(67)は、武蔵小杉駅周辺でマイクを握った。たった1人での選挙戦。演説に使用するスピーカーや標旗を両手にぶら下げ、電車を乗り継いで演説会場を巡る。

腰に痛みを抱えながらも薬を服用して街頭に立ち続け、声をからしながらも訴えを重ねてきた。「私の立候補によって発達障害の人やマイノリティーの人、市民が勇気づけられることが少しでもあれば幸いです」

手に持つ原稿に書かれていないことも加えるようになった。「世の中を変えるのは一人一人の人間の力で。腐った世の中をみんなの力で変えていきたいと思います」。この日も、いつものように演説を締めくくった。

川崎市長選に立候補している宮部龍彦氏について、経歴や出馬に当たっての主張に著しい差別的言動があり、差別が拡散する恐れがあるため、異なる扱いとしております。

おことわり
川崎市長選に立候補している宮部龍彦氏について、経歴や出馬に当たっての主張に著しい差別的言動があり、差別が拡散する恐れがあるため、異なる扱いとしております。